

古代信濃における 開発・環境管理と地域の支配

Development, Environmental Management
and Regional Control in Ancient Shinano

義江彰夫

はじめに

- ①古墳時代の豪族の開発と環境管理と地域支配
- ②律令制下の豪族の開発と環境管理と地域支配
- ③中世への展望

【論文要旨】

本稿は、近年の発掘調査で判明した、長野県更埴市更埴条里遺構・屋代遺跡群関係地域の古代に関する画期的知見を基礎にすえ、これを、同時代文献史料・神社祭祀記録・現行神社祭礼行事・民間伝承等と重ね合せ、古代信濃の最も古くからの中心地善光寺平南部地域の、4世紀から9世紀に及ぶ豪族（国造→郡司）の開発と環境管理と地域支配をめぐる問題を究明しようとするものである。

第一節では大和王権下の4～7世紀を検討する。すでに4世紀後半には、この地域を支配する豪族により、千曲川上流から直接取水し、同地域を潤す水路を設け、残る水を計画的に排水して、大開発の下地が整えられたと推定されるが、開発の具体相までは分らない。5世紀以降取水路の安定的確保が困難になる中で、おそらく欽明朝との関係を持ちながら6世紀半ばまでに、上記の用水系統を継承してこの地域を支配した国造金刺舎人氏は、取水口と排水口に接して各々神社を設け、その間に居館を備えて、神（自然）との関係の調整をより重視する開発を展開したと推定される。この開発は、限度を超えたところで開発を止め、自然を統禦する神に供犠を献上し、破壊された自然との関係を修復する面も兼備していたと考えられる。又、国造金刺氏の支配は、開発が引き起こす自然（神）の怒りを鎮める霊能を持っていることで正当化されたと考えられる。

第二節では律令国家下の8・9世紀を検討する。8世紀の間この地域を統べる埴科郡領金刺舎人氏の開発・環境管理・地域支配の内実は、前代と大差ない。しかし9世紀、条里制定着に伴い、可耕地の全耕地化を目指す開発を具体化したと見られる。しかし、郡司はこのような開発に係わる分、逆に前代以来の祭祀を重視して、自然（神）の報復を贖おうとし続けたと判断される。

10世紀以降、金刺舎人氏は史料から姿を消すが、中近世を通して武士領主支配の下でも同氏の開発と環境（自然）に関する論理は土台として継承されていったと考えられる。